

科学研究費助成事業 研究成果報告書



令和 6 年 5 月 15 日現在

機関番号： 1 5 4 0 1
研究種目： 奨励研究
研究期間： 2023 ~ 2023
課題番号： 2 3 H 0 5 0 5 2
研究課題名 障害のある児童生徒の図画工作・美術科における好奇心アセスメントの開発

研究代表者

横山 由季 (YOKOYAMA, YUKI)

広島大学・附属東雲小学校・教諭

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 400,000 円

研究成果の概要：本研究の目的は、発達障害や知的障害のある児童生徒の創造活動における好奇心の特徴を教師評価により測る尺度を開発すること、そして、本尺度を、主体的な学びが実現できる授業づくりの指標とすることであった。その結果、知的障害のある児童の好奇心が高まる創造的活動の開発や探究を深める様子の分析、考察を行うことができた。好奇心を育む要因として交流方法や場の創出などが挙げられた。しかし、尺度の開発までには至らなかったため今後の課題である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、広島県立歴史博物館、広島大学など地域と連携し、授業を開発した。児童は、本実践を通して、余暇活動の一つとして家族と博物館や美術館等に訪問する機会が増えた。そして、新奇で多様な情報を求めようとする拡散的好奇心（西川，2021）が実践終了後も持続したことがうかがえた。成果発表として、日本特殊教育学会第61回大会、日本LD学会第32回大会にてポスター発表を行った。また、InSEA World Congress 2023（トルコ）にて口頭発表（オンライン）を行った。

研究分野： 障害のある児童の創造的活動における探究と好奇心

キーワード： 特別支援教育 図画工作 好奇心 アセスメント 小学校特別支援学級 探究

1. 研究の目的

近年、好奇心に基づいた探究力の強化が目指され（内閣府，2021），児童生徒の主体性を引き出す指導が求められている（文部科学省，2018）。杉浦（2007）は，探究を状況の変容とし，子ども自ら探究し続ける力を自ら養い続けることが大切であるとしている。

好奇心は，新しい情報を獲得したい内発的な欲求で，動機づけや探究の源とされている（Silvia，2012）。欧米では，好奇心を高める指導や好奇心測定尺度の研究がさかんである（Clark, Harbaugh & Seider, 2019; Kashdan et al., 2009）。日本は，1970年代から知的好奇心の育成が提起され（波多野・稲垣，1973），西川（2021）により好奇心の個人差の測定尺度が開発されているが実証的研究は少ない。

障害のある生徒を対象にした探究型指導では，彼らの理解度が向上したとされた（Easterly & Myers, 2011; Ryan et al., 2019）。一方，知的障害のある児童は，教師主導型の授業や失敗経験の蓄積により意欲や動機づけの低下が指摘されている（竹林地，2004; Cuskelly & Gilmore, 2014）。「支援されるばかりの「障害特性に合わせた教育」は，自分から選択肢を選ぶ可能性を奪ってしまう」（廣瀬，2015，p.79）ことが危惧されている。しかし，障害者であることで得られる肯定的な経験やアイデンティティがあるとする障害の肯定モデルが提唱され始めている（Swain & French, 2000）。

さらに，研究対象者が主体として研究に参画する研究手法が報告されている。人間理解を深め，芸術制作行為における探究を研究に位置づける Arts-Based Research（以下，アートベース・リサーチ）がある（Barone & Eisner, 2012; 小松，2023）。Coemans and Hannes（2017）は，研究対象者と研究者との対等な関係性の中で対話やプロセスを重視し，アートを通じた教育・社会的実践を探究する研究手法と述べている。その上，障害者や少数民族などバルネラブルな人達の可能性を引き出す手法として価値づけている。横山・池田・若松（2022）は，アートベース・リサーチの教育的アプローチの一つである A/r/tography（アートグラフィー）により，知的障害のある児童が創造的活動の中，自発的に好奇心による疑問をもち，新規の表現を探究していたと報告している。このような姿は，支援される対象者としての障害観に異を唱える教育観の嚆矢となる。今後，事例数を増やし，好奇心の高まりや探究過程の様相，及びそれらの促進要因を解明することが課題である。なお，本研究における創造的活動とは，新規の表現を生み出す取り組みのことである。

そこで，本研究では，まず障害のある児童の創造活動における好奇心の特徴を教師評定により測る尺度を開発する。本尺度を，主体的な学びが実現できる授業づくりの指標とする。そして，好奇心の高まりや探究過程の様相，及びそれらの促進要因を解明する手掛かりを得ることを目的とした。

2. 研究成果

本研究では，2つの実践を開発し考察した。対象者は，いずれも知的障害のある児童（以下，児童）であった。

（1）自立活動「トリックアート」

自立活動の時間で「トリックアート」の制作や交流を行った。児童の好奇心の高まりや探究する様子をエスグラフィーの手法で考察した。「トリックアート」は，児童が好きな画像や写真の中に入り込んだ合成写真のことである。児童は，友達との交流を通して友達の言動に感化されたり，新規な表現を生成したりする姿が見られた。また，実践を終了した後も，児童は好奇心をともなう探究や創造的な表現を生み出し，創造的自己効力感が養われたことが推察された。本研究で，好奇心を育む要因として，交流方法，場の創出，新奇な活動が見出された。

（2）生活単元学習「歴史博物館を見学しよう」

小学校特別支援学級，広島県歴史博物館，広島県支援機器研究会，アート活動を支援する NPO 法人，広島大学が連携して実践を開発した。本実践では，遠隔操作ロボット Double3 を用いて歴史博物館の鑑賞を行った。児童は，未経験の物に関心をもつことが難しい一面があった。しかし，本実践では積極的にロボット Double3 に接近したり，博物館の展示品を拡大して鑑賞したりした。これは，新奇で多様な情報を求めようとする拡散的好奇心（西川，2021）が高い姿であった。本実践を通して，児童の文化芸術に親しむ資質・能力として，児童の好奇心が喚起された。

以上，2つの実践を通して，知的障害のある児童が主体的に好奇心をもち，探究する姿を抽出することができた。本研究の目的の一つであった尺度の開発には至らなかったが，今後，教育現場に役立つ尺度の開発に向け研究を継続する。

引用文献

内閣府『第6期科学技術・イノベーション基本計画』, 2021

<https://www8.cao.go.jp/cstp/kihonkeikaku/6honbun.pdf> , 2024年5月5日閲覧

文部科学省『特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 総則編(幼稚園・小学部・中学部)』開隆堂出版, 2018.

杉浦美朗『真の知の教育 デューイ教育学の再構築 学校教育実践学の構築を目指して』風間書房, 2007.

Paul J. Silvia, "Curiosity and Motivation," in R. M. Ryan (Ed.), *The Oxford Handbook of Human Motivation*, Oxford University Press, USA, 2012, pp. 157-166.

Clark, S., Harbaugh, A. G., & Seider, S. "Fostering adolescent curiosity through a question brainstorming intervention," *Journal of adolescence*, 75, 2019, pp.98-112.

Kashdan, T. B., Gallagher, M. W., Silvia, P. J., Winterstein, B. P., Breen, W. E., Terhar, D., & Steger, M. F. "The curiosity and exploration inventory-II: Development, factor structure, and psychometrics," *Journal of research in personality*, 43(6), 2009, pp.987-998.

波多野誼余夫・稲垣佳世子『知的好奇心』中央公論新社, 1973.

西川一二「好奇心 新たな知識や経験を探究する原動力」, 小塩真司編『非認知能力 概念・測定と教育の可能性』北大路書房, 2021, pp.63-81.

Easterly III, R.G. & Myers, B.E. "Inquiry-based instruction for students with special needs in school based agricultural education" . *Journal of Agricultural Education*, 52 (2), 2011, pp.36-46.

Joanna Ryan, J. Matt Jameson, Olivia Fudge Coleman, Carrie Eichelberger, Jessica A. Bowman, Lyndsey Aiono Conradi, Susan S. Johnston and John McDonnell, "Inclusive Social Studies Content Instruction for Students with Significant Intellectual Disability Using Structured Inquiry-Based Instruction," *Education and Training in Autism and Developmental Disabilities*, vol.54, no.4, 2019, pp. 420-436.

竹林地毅「知的障害のある児童生徒の内発的動機づけを重視した授業に関する研究」『独立行政法人 国立特殊教育総合研究所』2, 2004
https://www.nise.go.jp/kenshuka/josa/kankobutsu/pub_f/F-124.html , 2024年5月5日閲覧

Monica Cuskelly, Linda Gilmore, "Motivation in Children with Intellectual Disabilities," *Research and Practice in Intellectual and Developmental Disabilities*, vol.1, no.1, 2014, pp. 51-59.

廣瀬信雄「教師の主体性を問い直す」, 成田孝, 廣瀬信雄, 湯浅恭正編『教師と子どもの共同による学びの創造特別支援教育の授業づくりと主体性』大学教育出版, 2015, p.79.

Swain, J. and French, S, "Towards an Affirmation Model," *Disability and Society* 15, 4, 2000, pp.569-582.

Barone, T. & Eisner, E.W. (2012). *Art Based Research*. Sage .

小松佳代子編『アートベース・リサーチの可能性 制作・研究・教育をつなぐ』勁草書房, 2023 .

Sara Coemans, Karin Hannes, "Researchers Under the Spell of the Arts: Two Decades of Using Arts-Based Methods in Community-Based Inquiry with Vulnerable Populations," *Educational Research Review*, vol. 22, 2017, pp. 34-49.

横山由季・池田吏志・若松昭彦「A/r/tography による知的障害のある児童の探究過程の考察 : 特別支援学級における図画工作科の実践より」『初等教育カリキュラム研究』 第十号, 2022, pp.39-48.

主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1．著者名 横山由季 池田史志	4．巻 45
2．論文標題 知的障害のある児童の創造的活動における好奇心と探究過程の様相 「トリックアート」の実践を通して	5．発行年 2024年
3．雑誌名 美術科教育学会誌	6．最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件／うち国際学会 1件）

1．発表者名 横山由季 池田史志
2．発表標題 遠隔操作ロボットDouble3を用いた他校との交流授業 他機関との連携による小学校特別支援学級における実践
3．学会等名 日本特殊教育学会
4．発表年 2023年

1．発表者名 横山由季 池田史志
2．発表標題 Proactive Learning in Students with Disabilities Using a Telepresence Robot in a History Museum.
3．学会等名 InSEA World Congress 2023（国際学会）
4．発表年 2023年

1．発表者名 横山由季 長山弘
2．発表標題 特別支援学級と通常の学級の児童における双方向の関係をめざした交流 タブレット端末による「ミュージックビデオ」制作の実践より
3．学会等名 日本LD学会
4．発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

研究組織（研究協力者）

氏名	ローマ字氏名
----	--------